

政治的信条から闘争団体へ 最高の真実ともいふべき一般の世界観的理想の観念を、一定の限られた厳格な組織をもった、精神的にも意志的にも統一的な政治的信念をもち、闘争しようとする団体に移行させることは、その理念の勝利の可能性というものが、その手ぎわよい実現だけにかかっているのだから、最も重要な仕事なのである。この真理を自分一人では多少ともはつきりと確実に感じており、一部のものはおそらく理解しているような数百万人の人々の群の中から一人の男があらわれて、疑問を許さぬ力で大衆の動揺している観念界から確固たる原則をつくりだし、自由な波のまにまにたまたまよつてくる精神界から統一的な信念と意志をもった固い岩石のような団結が生じてくるまで、この原則の無比の正当さのために闘争を続けなければならない理由がここにあるのだ。

こうした行動に対する一般的権利は、その必然性の中に根拠があり、その行動に対する個人的権利は、その成果の中に根拠をもつのである。

人種と人格に反対するマルクシズム われわれが「民族主義的」ということばから、その意味に最もよく合った中核をとりだそうとするならば、次のようなことを確認することができる。

今日のわれわれのありきたりの政治的な世界観は、一般に、国家には実際それ自体に創造的に文化を形成する力が与えられているのだが、国家は人種的前提とはまったく関係なく、むしろ経済的必要から生まれてきたか、せいぜい政治的な権力欲から自然に出てきたものだ、という観念

国家

人格、人種

にもとづいている。この根本観念は理論的に首尾一貫した教育を続ければ、ある人種の原動力を誤認するばかりか、人格の過少評価にまで導くのである。というのは、個々の人種が一般的な文化形成能力について差異があることを否定することが、この最も大きな誤りをまた個々の人種の判断にも及ぼしてしまうにちがいないからだ。いろいろの人種の質が同一であるという仮定は、さらに民族についても、また個人についても同様な見方をさせる根拠になる。だから国際的マルクシズム自体はまた、實際上すでに昔から存在していた世界観的な立場と解釈を、一定の政治的な信条の形にユダヤ人カール・マルクスが転用したにすぎないのである。マルクシズムの教説の驚くべき政治的成功は、かような一般は昔からあつた害毒の下地がなかったならば、決してできなかったのである。カール・マルクスこそ実際に、だんだんと墮落していく世界の沼沢の中で、その最も本質的な毒素を予言者のするどい目で認識し、それを抽出し、この地上の自由諸国民の独立的存在を急速に崩壊せしめるために、魔術者のように濃厚な溶液につくりあげた、百万人の中の一人であるのだ。しかし、これらのすべては自分の人種のために行なつたのだ。

このようにマルクシズムの教説は、今日一般に通用している世界観の簡潔な精神的抜萃である。こういう根拠からみればたしかに、マルクシズムに対するわれわれのいわゆるブルジョア社会の人々のすべての闘争は不可能であり、まさしく笑止のいたりである。というのは、これらのブルジョア社会にも本質的にこれらの毒素が浸透しており、マルクシズムの世界観とは一般にはやその程度と人物がちがうだけで、その世界観に忠誠を誓っているからである。ブルジョア社会はマルクス主義的であり、マルクシズム自体が世界を計画的にユダヤ人の手中に移そうとしている

のに、特定の人間のグループ（ブルジョアジー）が支配する可能性を信じているだけなのだ。

人種と人格に立脚する民族主義的態度　これに反して民族主義的世界観は、人類の意義を人種の根源要素において認識するのである。それは原則として国家をただ、目的のための手段と見做して国家の目的としては人間の一種としての存在を維持することと考える。だから民族主義的世界観は決して人種の平等を信じないばかりか、かえって人種の価値は優劣の差異があることを認め、そしてこうした認識から、この宇宙を支配している永遠の意志にしがたつて、優者、弱者の勝利を推進し、劣者や弱者の従属を要求するのが義務である、と感ずるのである。したがって原則的には、民族主義的世界観は自然の貴族主義の根本思想をいだし、この法則がすべての個体にまで適用されることを信ずるのだ。それは単に人種間にある種々の価値の差異を認めるばかりでなく、また一人一人の人間の価値にも差異があることを認めるのだ。群衆の中から、民族主義的世界観のために、個人の重要性がむき出しになる。こうして民族主義的世界観は、解体的なマルクシズムと反対に組織的に働く。民族主義的世界観は人類が理想的なものになる必然性を信ずる。なぜならば、また一方では、ここにこそ人類の存在のための前提を認めるからである。しかしながら、ある倫理的理念が、より高い倫理をもっている人種の生存をおびやかす場合には、民族主義的世界観はまた、その理念に生存権を許容することができない。というのは雑種化し、ニグロ化した世界では、すべての人間的な美や崇高というような概念や、人類の将来を理想化しようとするあらゆる観念が、永久に失われてしまうだろうからである。

ヨーロッパ大陸では、人間的な文化や文明は、アリア人種の存在と不可分に結びついている。アリア人種が滅亡し、あるいは没落したならば、この地球上は、ふたたび文化なき暗黒なヴェールにおおわれた時代に沈むにちがいない。

だが、民族主義的世界観から見れば、人類の文化の担い手を滅ぼすことによって、人類文化の存立をくつがえすことこそ、最も呪うべき罪である。あえて神の似姿をほうとくしようとするものは、この奇跡の恵み深い創造主をおかし、楽園放ちくに手をかすものである。

自由な力の競争の促進　そのようにして民族主義的世界観は自然の内的要求に応ずるのである。というのは、それはたえずより優れた高い相手側を育てるにちがいない力の自由な競争を復興させ、ついには最も優秀な人類がこの地上を獲得し、地球上、地球外の諸領域で自由に活躍する道が開かれるからである。

われわれはみんな、遠い未来に人類には問題が生ずるだろうが、それを克服するために最高の人種だけが支配民族として、地球上のあらゆる手段と可能性に支持されて、招かれるのだ、という予感をもっているのである。

*

党のためのまとめ　そのようにして民族主義的世界観をその意味する内容にしたがつて一般に定めていくと、千差万別の解釈に到達することはもちろんである。實際上、われわれは最近のドイツにできる新しい政党で、この世界観をもっていないものを見いだすことはほとんどない。